

百人一首のフランス語訳に関する一考察

——「もみぢ」の歌を対象として——

A Study on French Translations of the *Hyakunin-Isshu*

——The “*Momiji*” Poems——

Hiroimi Iizuka
飯塚ひろみ

要 旨

本稿は、日本文学研究の立場から百人一首のフランス語訳を考察したものである。日本における解釈上の問題点等を踏まえつつ、「仏訳された百人一首」歌のうち、「もみぢ」の表現を含む（もしくは関連する）歌をピックアップし、各訳を対照した。一連の考察により得られたことは次のとおりである。

- ① 「もみぢ」の表現は、「葉の種類を表す」「葉の色を表す」「葉の状態を表す」のように分かれたが、歌ごとに表現や方法が異なるのではなく、各訳者はほぼ一貫した方針で語を選択している。
- ② 「山」や「川」の表現にも上述のような傾向が看取できる。（さらに考察が必要）
- ③ 和歌独特の「掛詞」や日本独特の物（例えば「幣」）は、仏訳には限界があるようだ。
- ④ 音節を整えるために語の操作（あえて複数形を使う、一般的でない語をあえて用いるなど）をすることがある。（Sieffert 訳において）

とくに④については瞠目した。当然のことながら、和歌は5-7-5-7-7の調べを持つ。ところが、Sieffert 以前の訳にはその調べを再現しようとする姿勢がほとんどみられなかったからである。音節の問題は、今後の考察において重要な要素になると考える。

キーワード：百人一首・フランス語・仏訳・Hyakunin-Isshu・Traduction française

はじめに

百人一首の翻訳は、英訳を筆頭に、おそらくは様々な国の言語に翻訳されているであろう。「翻訳された百人一首」の研究も世界各地で行われていることであろう。しかしながら、「翻訳された百人一首」を研究対象とした日本の論文はごくわずかである。試みに国立国会図書館のデータベースで検索してみたところ、英訳に関しては21件のヒットがあったが、他のメジャーな言語に関しては0件であった¹。

このような現状において、日本文学研究の立場から百人一首のフランス語訳（以下「仏訳」）をわずかなりとも紹介し、検討することは、これからの日本文学研究の発展に貢献しうるものと考えられる。そこで本稿では、日本における解釈上の問題点等を踏まえつつ、「仏訳された百人一首」歌のいくつかを取り上げ、考察を加えてみたい。

1. 考察対象

百人一首の仏訳を探す手段としては、翻訳の問題について論じた Pigeot (1985) および Pigeot (1986) を参照した。ここから情報が得られた文献（仏訳に関するものは4つ）のうち、Revon (1910)、Renondeau (1971)、Nakamura et Ceccatty (2005)²の3文献を入手した。加えて、Pigeot の論の後に出版された Sieffert (1993) も入手することができたので、計4文献が手もとにある。このうち「百人一首」全歌を訳しているのは、Nakamura et Ceccatty と Sieffert の2文献であり、他は、日本の和歌集や文学作品などからのアンソロジーとして翻訳された中に、百人一首歌もいくつか存在するという形である。

本稿では、上記4文献から拾い出すことができる百人一首歌の仏訳を考察対象とし、歌によっては Pigeot (1985)・Pigeot (1986) において確認できる Bonneau の仏訳³（孫引きとなる）、ならびに Pigeot (1986) に見える Pigeot 自身の仏訳を加えることとする。

今回取り上げるのは「もみぢ」の表現を含む（もしくは関わりのある）歌の仏訳である。これらを足がかりとして、フランス語訳百人一首の世界への一歩を踏み出してみたい。

2. もみぢ踏み分け (5 番歌)

奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき (猿丸大夫)

ここに詠まれた「もみぢ」は、もともと「黄葉」(萩) だったものが、時代の流れの中で「紅葉」(楓) に変遷したとされる⁴。また、この歌には、紅葉を踏み分けるのは鹿か人か (さらに言えば作者か他の誰かか) といった論点が古来ある⁵。Pigeot (1985) もこれらについて言及しており、さらに「鹿の声を聞いて悲しむ人がだれか」という問題も提示している。それらを中心に見てみたい。仏訳は古い順に掲げる。

仏訳	もみぢ	踏み分け	声聞く
(1) Revon 訳 Combiem triste est l'automne Quand j' <u>entends</u> la voix Du cerf qui brame, En foulant et dispersant les feuilles des érables Dans les profondeurs de la montagne!	楓の葉	鹿	私
(2) Bonneau 訳 Aux profondeurs de la montagne, Foulant l' <u>érable</u> qu'il écarte, Le cerf gémit : Et à l'écouter, jamais L'automne ne m'a pesé plus triste!	楓	鹿	(私)
(3) Renondeau 訳 Au fond de la montagne, Traversant <u>les feuillages rouges</u> , Le cerf brame, Quand <u>on entend</u> sa voix Comme l'automne paraît triste!	赤い葉	鹿	私たち
(4) Nakamura et Ceccatty 訳 Quand au fond de la montagne <u>les feuilles mortes</u> sous les pas se dispersent Et qu' <u>on entend</u> l'appel du cerf, l'automne est triste.	枯れた葉		私たち
(5) Sieffert 訳 Au fond des montagnes foulant <u>le rouge feuillage</u> va bramant <u>le daim</u> et lorsque j' <u>entends</u> sa voix ah que l'automne est poignant	赤い葉	鹿	私

「もみぢ」の表現は様々である。(1) Revon と (2) Bonneau は具体的に「楓」とする。楓は紅葉するが、「楓」から即座に赤色が想起されるとは限らない。(3) Renondeau と (5) Sieffert は「赤い葉」とダイレクトに色を示している⁶。(4) Nakamura et Ceccatty は「枯れた葉」と具体的な葉の状態を表しているが、これについては「この歌での唯一の色（しかも豪華な色）がなくなってしまう」(Pigeot (1985) p.4) と批判されている。「踏み分け」るのは (4) 以外は「鹿」である⁷。

「声聞く」の主体は、(3) (4) では「on」（表では「私たち」としたが、「私」も含む世間一般の人と捉えるのがよい）であり、(1) (5) が「je」（私）である。「je」の場合、作者がひとりさびしく鹿の声を聞いているイメージが強まる。(2) は「三人称にしながら me を入れて主観的な色をつけるように努めたよう」(Pigeot (1985) p.5) と評されている。一応「私」と解釈しておく。

5つの訳の中では、Renondeau 訳と Sieffert 訳が似ていることがわかる。ただし、注目したいのは、(1)～(4) がすべて「山」の部分で「de la montagne」（単数形）とするところ、Sieffert 訳は「des montagnes」と複数形にしていることである。これはおそらく、「Au fond des montagnes」なら5音だが、「Au fond de la montagne」では6音となってしまうからであろう。Sieffert は、和歌の5-7-5-7-7を再現する試みをしているとみられ、そうであれば1行目は5音でなくてはならないのだ。すなわち、Sieffert 訳は音節を重視するがゆえに「山」を複数形にしたものと思われる。

3. 手向山 (24 番歌)

「山」と「もみぢ」が用いられた歌を続けて見ていく。

このたびは幣もとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに（菅家）

この歌は、「手向山」について、場所の特定や固有名詞か否かが議論されてきた⁸。仏訳においてもこの「手向山」の処理は難しいところであろう。また、「このたびは」は「この度」に「この旅」が掛かるが、仏訳はどう表現しているだろうか。

仏訳	このたび	手向山	もみぢ
(1) Revon 訳 <u>Cette fois-ci</u> , Je n'ai même pas pris de bandelettes . . . O « <u>Mont des Offrandes</u> », Des brocarts de <u>feuilles d'érable</u> Au bon plaisir de dieu!	今回	奉納山	楓の葉

<p>(2) Renondeau 詠 Pour <u>ce voyage</u> Je n'ai même pas pris de <i>nusa!</i> Qu'au <u>mont des Offrandes</u> Le dieu agréé à son bon plaisir Un brocart de <u>feuilles rouges</u>.</p>	この旅	奉納山	赤い葉
<p>(3) Nakamura et Ceccatty 詠 <u>Cette fois-ci</u>, je suis venu les mains vides dans la <u>montagne des offrandes</u> Ce tapis de <u>feuilles colorées</u> et ce tissu de branches reviennent aux dieux.</p>	今回	奉納の山	色づいた葉
<p>(4) Sieffert 詠 Je n'ai <u>cette fois</u> point apporté de nusa au <u>Mont des Offrandes</u> brocart de <u>rouge feuillage</u> veuille le dieu agréer</p>	今回	奉納山	赤い葉

「このたび」については、「ce voyage」（この旅）、あるいは「cette fois」（この度）と、掛詞の意味のうちいずれか一方を選択した形である。

「手向山」はすべて「offrande」が用いられている。「offrande」は「(神への) 奉納(物)」の意であるが、(3) Nakamura et Ceccatty は「la montagne des offrandes」で普通名詞の扱い、(1) Revon (2) Renondeau (4) Sieffert は固有名詞を導く「mont」を用い、さらに「mont」「offrande」の最初を大文字にしたり《 》をつけたりして固有名詞化している。そのため、表では「奉納山」とした。

「錦」は(3) 以外は「brocart」（プロケード）、これは錦や金襴に似た織物ということである。(3) は「tapis de feuilles colorées」（色づいた葉の絨毯）と「tissu de branches」（木の枝の織物）と具体的である。

神道独特の「幣」については、(1) は「bandelettes」（細紐）の語を選んでいるが、これは「包帯」のようなものも表すので、もとの「幣」を想像することは難しいであろう。(2) と(4) はそのままローマ字表記で「nusa」、(3) は「je suis venu les mains vides」（私は空の手で来た）つまり「何も持たずに来た」で「幣」を訳すことを放棄している。

また、元の歌の「とりあへず」は、幣の用意ができなかったとする説(A) と、紅

葉のあまりの美しさに、自分の持つみすぼらしい幣を取り出すことができないとする説 (B) がある⁹。(1) (2) は「n'ai même pas pris」(～さえ持ってきていない)、(3) は上記に述べたように「何も持たずに来た」、(4) は「Je n'ai (cette fois) point apporté」(持ってきていない) で、いずれも A 説に依っていることがわかる。

「もみぢ」については、Revon は 5 番歌と同様に「楓の葉」、Renondeau と Sieffert はともに「赤い葉」だが、両者は微妙に単語が異なる。これについては後述する。Nakamura et Ceccatty は「色づいた葉」と葉の状態を表している。

4. 峰のもみぢ葉 (26 番歌)

小倉山峰のもみぢ葉心あらばいまひとたびのみゆき待たなむ (貞信公)

宇多院の大堰川行幸に随った際の藤原忠平の歌である。峰の紅葉を擬人化して呼びかけるものである。擬人化にどの人称を選択するのが興味深い。

仏訳	もみぢ葉	擬人
(1) Revon 訳 Les <u>feuilles d'érable</u> de la cime Du mont Ogoura, Si <u>elles</u> ont un cœur, Une fois de plus Voudront attendre une auguste visite	楓の葉	彼女たち
(2) Nakamura et Ceccatty 訳 Si <u>les feuilles rougeoyantes</u> des cimes du mont Ogura avaient une âme Attendraient-elles une fois encore le passage de Sa Majesté en visite?	赤くなっ ている葉	彼女たち
(3) Sieffert 訳 Du Mont Ogura <u>rouge feuillage</u> des cimes si <u>tu</u> as du cœur <u>tu</u> attendras la prochaine venue de Sa Majesté	赤い葉	君・おまえ

まず、「もみぢ葉」の翻訳姿勢はそれぞれ先に見た歌と変わらない。

擬人化の人称は (1) Revon と (2) Nakamura et Ceccatty が三人称の「elles」(彼女たち) となっている。「ils」(彼ら) でないのは、「feuille」(葉) が女性名詞であるた

めだが、となると、(1) (2) に擬人化の意識があったかどうかは不明である。単に、女性名詞「Les feuilles d'érable」「les feuilles rougeoyantes」を人称代名詞に換えたにすぎないかもしれない。

(3) Sieffert は二人称の「tu」を選んでいる。なぜ「tu」なのだろうか。ここにも音節の問題があろうと思われる。フランス語の二人称には「tu」の他に「vous」(あなた、あなたがた)があるが、3行目「¹si ²tu ³as ⁴du ⁵cœur」(5音)を「vous」で構成すると「¹si ²vous ³avez ⁴du ⁵cœur」⁶と6音になってしまうのだ。

2行目も同様で、「cime」(頂)を複数形にして「rouge feuillage ¹des ²cimes ³de ⁴la ⁵cime」⁶としているのは、単数形の場合は「rouge feuillage ¹de ²la ³cime」⁴とこれも1音多くなってしまうためであろう。もっと言えば、フランス語の名詞は冠詞をとまうので、本来は「le rouge feuillage」とするところを、音のために冠詞を犠牲にしたともいえよう¹⁰。

このように、Sieffert 訳には音をまもるための語の操作が施されているとみられる。このような工夫(あるいは犠牲)により出来上がった26番歌の仏訳は、結果としては良い方向に働いたと感じられる。cime(頂)が複数形であることにより、遙々と見渡される川畔の風景が想起されるし、「elle」や「vous」でなく「tu」であることで「権門の貴族が上皇の意を得て呼びかける」という、もとの歌の背景がより反映されたことになるからだ。

5. 流れもあへぬ (32 番歌)

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり (能因法師)

「山川」は「ヤマガワ」であり、山の中を流れる谷川のことである。「流れもあへぬ」は、間断なく落ちる葉が川面を覆う様子を詠んだとする説(A)と、浅瀬に散った葉が積もって流れない様子を詠んだとする説(B)があり、後者が主流のようだ¹¹。

仏訳	山川	流れもあへぬ	もみぢ
(1) Revon 訳 Dans le torrent de la montagne Batiés par le vent, Des palissades qui protègent les rives : Ce sont les feuilles d'érable Qui ne peuvent suivre le flot	山の急流	流れについていけない	楓の葉

<p>(2) Renondeau 訳 <u>Sur le torrent</u> Le vent a tendu Un barrage. Ce sont <u>les feuilles rouges</u> Qui <u>n'ont pu s'écouler</u></p>	急流	流ることができない	赤い葉
<p>(3) Nakamura et Ceccatty 訳 Sur <u>le torrent</u> un barrage élevé par le vent? Euvre des <u>feuilles rouges</u> <u>arrêtées dans leur cours.</u></p>	急流	流れの中で止まっている	赤い葉
<p>(4) Sieffert 訳 La claie que le vent avait jetée au travers du <u>torrent des monts</u> était <u>feuillage rougi</u> qu'<u>il n'avait pu entraîner</u></p>	山の急流	流ることができない	赤くなった葉

「川の流れはすべて「torrent」（急流、早瀬）とされており、(2) Renondeau と (3) Nakamura et Ceccatty は「山の」を省いている。(1) Revon は 5 番歌同様「de la montagne」、(4) Sieffert は「des monts」とし「de la montagne」でないのはやはり音節の問題であろう。単数形の「de mont」でも音節は変わらないが、単数形の場合は通常後ろに固有名詞が必要となるため、固有名詞を伴わなくてすむ複数形にしたものと思われる。

「しがらみ」は、「柵」を表す「palissade」「barrage」「claie」の語がそれぞれ選択されている。どれが一番ふさわしいともいえないが、音節でいえば「claie」が 1 音、他が 2 音なので、Sieffert 訳の 1 行目に「palissade」や「barrage」を持ってくると音が崩れることになる。

「流れもあへぬ」は、全訳とも先に挙げた B の説で一致している。(3) には不可能表現がみられないが、「流れもあへぬ」の「あへぬ」は「…あふ+打消」で「完全に…しきれない」、すなわち「…できない」となるので、(3) 以外の 3 つの訳がより元の歌の表現にならっているといえよう¹²。

「もみぢ」は Revon 訳が例によって「楓の葉」、Nakamura et Ceccatty 訳がここでは色を持たせて「赤い葉」、Sieffert 訳は状態を示して「赤くなった葉」としている。

ほかに特記すべき事項として、Sieffert 訳が「était」（半過去）を用いて元の歌の「けり」のニュアンスを出す工夫をしていることを指摘しておきたい¹³。

6. 三室の山（69 番歌）

あらし吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり（能因法師）

「三室の山」は「三諸の山」ともいい、現在の奈良県生駒郡にある「神南備山」であるという。その麓を流れるのが「竜田の川」であり、「三室の山」と「竜田の川」という二つの歌枕の対照が注目すべき点として挙げられている¹⁴。この歌は特に問題となるような表現もなく、近代においては「見ばえのしない歌」とまで言われたという¹⁵。仏訳においては他に「もみぢ葉」を「錦」とする見立てをどう表しているかにも注目したい。

仏訳	三室の山	もみぢ葉
<p>(1) Revon 訳 Au souffle de la tourmente, Du <u>mont Mimuro</u> Les feuilles d'érable, En vérité, sont devenues le brocart De la rivière Tatsouta!</p>	三室山（単数形）	楓の葉
<p>(2) Nakamura et Ceccatty 訳 Le vent de la tempête souffle sur <u>les montagnes de Mimuro</u> et <u>les feuilles pourpres</u> Tissent leur dessein sur la rivière Tatsuta.</p>	三室の山（複数形）	緋色の葉
<p>(3) Sieffert 訳 Des <u>monts Mimuro</u> au vent qui souffle en tempête <u>le rouge feuillage</u> sur la Tatsutagawa tisse un somptueux brocart</p>	三室山（複数形）	赤い葉

「錦」は (1) Revon と (3) Sieffert は 24 番歌と同じ「brocart」である。(1) は「竜田川で楓の葉が本当に錦になった」、(3) は「赤い葉が竜田川の上に豪華な錦を織る」となる。(2) Nakamura et Ceccatty は「錦」を用いず、そのまま訳すなら「緋色の葉が竜田川の上に彼らの意図を織る」となるが、おそらく「dessein」（意図）は「dessin」（デザイン）の誤植であろう。

「三室の山」の表現はそれぞれ異なり、固有名詞か否かの違いと、単数形と複数形の違いがある。「三室の山」＝「神南備山」は山が連なるような山脈ではないので、Revon 訳のように「mont Mimuro」で問題ないと思われるが、なぜなのか。先に見た「手向山」「小倉山」もすべて単数形であったし、Sieffert 訳が重視する音節も、「¹les ² ³ ⁴ ⁵ ⁶ ⁷ ⁸montagnes de Mimuro」はともかく、「¹Du ² ³ ⁴ ⁵mont ¹ ² ³ ⁴ ⁵Mimuro」と「¹ ² ³ ⁴ ⁵Des ¹ ² ³ ⁴ ⁵monts Mimuro」ではどちらも変わらない。疑問が残るが、百人一首には他にも山の表現があるので、それらと併せて将来の検討事項としておきたい。

「もみぢ葉」は Revon と Sieffert はこれまでと同様であり、Nakamura et Ceccatty は「pourpre」（紫がかった赤、緋色）を用いている。

Sieffert は「竜田の川」を「la rivière Tatsuta」でなく「la Tatsutagawa」としている。これもおそらく音節または調べの問題と思われるが、「rivière」の語なくして瞬時にそれが川であることを理解するのは難しいのではないだろうか。

7. ちはやぶる（17 番歌）

「竜田川」が詠まれたもう一首を見てみよう。

ちはやぶるの神代も聞かず竜田川からくれなるに水くくるとは（在原業平）

「ちはやぶる」（あるいは「ちはやふる」）は「神」にかかる枕詞¹⁶で、その意味は諸説あり、日本語の現代語訳の多くは「ちはやぶるの神代」を「不思議なことの多く起こった神々の時代」としている。また、「水くくる」は、「くくる」（絞り染めにする）と「くぐる」（水がくぐる）説がある¹⁷。枕詞「ちはやぶる」および「くくる」の清濁を仏訳はどのように処理しているだろうか。

仏訳	ちはやぶる	からくれなる	くくる
(1) Revon 訳 On n'a pas entendu parler même a l'age des dieux <u>Puissants et rapides.</u> De ces eaux qui <u>passent</u> A travers une <u>sombre pourpre</u> Dans la rivière Tatsouta!	強くて速い	濃い緋色	通る

(2) Nakamura et Ceccatty 訳 Sous l'empire des dieux mêmes nul n'entendit jamais parler d'une rivière Tatsuta Aussi <u>pourpre</u> sous les feuilles, l'eau <u>va</u> son cours!	なし	緋色	行く
(3) Pigeot 訳 Même à l'époque des dieux on n'a pas entendu dire Rivière de Tatsuta Que l'eau <u>se teignît</u> ainsi En une <u>pourpre</u> chinoise	なし	中国の緋色	染まる
(4) Sieffert 訳 Jamais fût-ce au temps des dieux <u>impétueux</u> l'on n'a ouï-dire de la Tatsutagawa qu'elle <u>ait eu</u> des eaux si <u>rouges</u>	荒ぶる	赤	持つ

(1) Revon と (4) Sieffert は「ちはやぶる」を「荒々しい」というイメージで訳したようだ。(2) Nakamura et Ceccatty は「ちはやぶる」を省いている。(3) Pigeot も「ちはやぶる」を訳していないが、これは Pigeot (1986) において翻訳の問題を論じるにあたっての試訳のようなものなので、あえて訳さなかったのかもしれない¹⁸。

「くくる」については、(1) は「ces eaux qui passent/A travers une sombre pourpre」(この水は濃い緋色を横切って通っている) で判断しかねる¹⁹。(2) は「d'une rivière Tatsuta/Aussi pourpre sous les feuilles」(葉の下でこれほどまでに赤い竜田川) なので「くくる」説としても取れる。(3) は「l'eau se teignît」が「染まった水」であるから明らかに「くくる」説、(4) も「ait eu des eaux si rouges」(真っ赤な水を持った) で「くくる」説と思われる。

この中で、Sieffert 訳は、「たとえ～であろうと」について、他の訳が「même」を用いているところを「fût-ce」、「聞かず」が「entendre」でなく「ouï-dire」、「からくれなる」が「pourpre」(緋色) でなく「rouge」(赤)、「竜田川」は 69 番歌同様「Tatsutagawa」と、全体的に語の選択がユニークであることがわかる。いずれも音節や調べを意識した結果と考えられる。

8. 「もみぢ」の表現について

さて、これまでの考察により、「もみぢ」の表現は訳者ごとにぼぼ類型化している

と捉えることができる。それぞれの特徴をまとめておこう。なお、冠詞は省略している。

歌	訳	Revon	Renondeau	Nakamura et Ceccatty	Sieffert
5		feuilles des érables	feuillages rouges	feuilles mortes	rouge feuillage
24		feuilles d'érable	feuilles rouges	feuilles colorees	rouge feuillage
26		feuilles d'érable	—	feuilles rougeoyantes	rouge feuillage
32		feuilles d'érable	feuilles rouges	feuilles rouges	feuillage rougi
69		feuilles d'érable	—	feuilles pourpres	rouge feuillage

Revon は一貫して「楓の葉」、Renondeau は「赤い葉」、Nakamura et Ceccatty は歌により使い分け、Sieffert は 26 番歌の「赤くなった葉」以外は「赤い葉」であった。Bonneau は訳が 5 番歌しかなかったため表では省いたが「l'érable」（楓）であった。

同じ「赤い葉」でも、Renondeau と Sieffert は表現が異なる。ひとつは「葉」の表現、もうひとつは形容詞「rouge」の位置である。「葉」は「feuille」（女性名詞、複数形「feuilles」）が一般的であり、Revon と Nakamura et Ceccatty もすべて「feuilles」を用いている。Sieffert はこの「葉」を「feuillage」（男性名詞、集合的な葉を表すので単数形）としている。「音」を重視する翻訳姿勢を持った Sieffert 訳では、2 音の「rouge」と併せて安定した 5 音が得られる「feuillage」を好んで用いるのであろう。また、形容詞は通常 Renondeau のように名詞の後に置くが、Sieffert はすべて「rouge」を前に置いている。これも、より美しい調べを求めるがゆえの操作であろう。

むすびにかえて

以上、共通する語が用いられた歌を並べて考察することにより、訳者ごとの特徴や翻訳姿勢をわずかなりとも確認することができたと思う。今後も他の歌を対象に「仏訳された百人一首」についての考察を続けたい。

今回得た印象としては、Nakamura et Ceccatty 訳と Sieffert 訳が、異質という点で両翼に位置しているように思われる。「百人一首」というまとまりで訳をしている両者が、奇しくもその個性において突出したのである。

Nakamura et Ceccatty はかなり独創的な訳を表出しており、その良し悪しを判断す

ることは先に延ばすが、現状においては「飲み込みにくい」ように感ぜられた。

Sieffert 訳は、都度述べてきたが、音節や調べのために語の操作をしているのが特徴的である。和歌において重要な要素である 5-7-5-7-7 の音節にこだわり、その調べを仏訳でも表現しようとする姿勢がみられ、音読するとそれがより一層はっきりする。また、本稿ではほとんど触れられなかったが、Sieffert 訳は、文章の構成や語順も元の歌に忠実であろうとする意識が看取できる。今後の研究のためにも、Sieffert 訳が刊行された功績は大きいと考える。

注

- 1 国立国会図書館サイト <http://www.ndl.go.jp/> 蔵書検索システムにて2017年10月15日検索。キーワード:「百人一首」+「英訳」および「百人一首」+「英語」。他に、フランス語・スペイン語・アラビア語・ポルトガル語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語・オランダ語について同様に検索した。
- 2 初版は Ryoji Nakamura et René de Ceccatty 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』 (édition de la Différence 1982)。
- 3 Pigeot (1985) の文献情報によれば、Bonneau Geoges 『Anhologie de la poésie japonaise』 (Geuthner 1935)。
- 4 島津 (2001) は、古今集の配列から見るとこの歌の「もみぢ」は萩の「黄葉」であるが、いつしか「楓」の「紅葉」とされるようになったことを述べている。(p.22)
- 5 島津 (2001) p.214。島津は最初、香川景樹の「人のふみ分るならんには、奥山のとなくてはかなはず。にてとありては鹿の上にかかれる事さらにまがはぬ事也」(『百首異見』)に従っていたが、島津 (2001) において「人説に改める」としている。吉海 (2011) にもこれについての論考がある。吉海は、井上宗雄の論「百人一首注釈雑考」(研究と資料 54、2005) をふまえ、人説を再検討している(第二章「猿丸大夫歌(五番)の「紅葉踏み分け」表現」)。
- 6 Pigeot (1985) は古今集(萩の黄葉)を重視し、「feuillages rouges」は少々問題だとする(p.4)が、注4にあるように、百人一首の時代には「紅葉」も受容されている。
- 7 Pigeot (1985) は、Nakamura et Ceccatty 訳を「踏み分け」を「鹿の声を聞く人に

掛ける説に依っている」(p.5)としている。

- 8 吉海(2011)にこの問題についての詳しい論考がある。吉海は、先行研究を吟味しつつ、「手向山」の用例検討をし、当時「手向山」が固有名詞として確立していなかったことを指摘している(第五章「菅家歌(二四番)の「手向山」表現】)。
- 9 島津(2001) p.217。鈴木・山口・依田(2002) p.36。
- 10 Pigeot(1985)は、「単語の意味・連想、歌の構文、イメージの順序、修辞法すべてを一首の歌の中に盛り込んだ翻訳をするのは無理なので、翻訳するということは、犠牲にすることを避ぶにすぎないのではないか」(p.6)と述べている。Sieffert訳はこれらに「音」の要素が加わるということになる。
- 11 島津(2001)は、「流れもあへぬと云は、さらにひまなく落つる木葉をいへる也」という『応永抄』の説と、「川の面にみちたる紅葉にはあらで、浅き瀬にせかれたる木の葉の散かさなるをよめる也」という契沖の説を紹介している。p.77。
- 12 「peuvent」「pu」は「pouvoir」(~できる)が活用した形。
- 13 本稿では深入りしないが、「avait jetée」「n'avait pu」と大過去を用いている点も注目される。大過去は、過去のある時点を起点にそれより前に起こった出来事を表すものであり、元の歌の時系列に忠実に翻訳しようという姿勢が見える。
- 14 鈴木・山口・依田(2002) p.89。
- 15 島津(2001) p.151。
- 16 この清濁をめぐっては、吉海(2017)で論じられている。吉海は、百人一首の歌としてならば「ちはやふる」と清音で読むのが妥当との見解を示す。
- 17 島津(2001) p.46。島津は、「業平にかえてよめば」、つまり古今集の歌として解釈するなら「くくる」が正しいであろうが、定家はおそらく「くぐる」説であったとみて、百人一首歌の解釈としては「くぐる」説を採っている。
- 18 訳はされていないが、「ちはやぶる」については「*chihayaburu, mot-oreiller de kami*: «divinité»」(執筆者注:ちはやぶるは神の枕詞)と説明がなされている。(Pigeot(1986) p.191)
- 19 「緋色」を何と捉えるかが曖昧である。「pourpre」を女性名詞(une pourpre)としているので、この場合、「緋色の染料」「緋色の布」の意も持つようである。「緋色の染料」とれば水が染まっている、すなわち「くくる」説になるし、「緋色

の布」ととれば川に落ちて流れているたくさんの紅葉の比喩となり「くぐる」説となる。が、これは非ネイティブゆえの深読みか。

文献一覧

- Revon (1910)** Revon Michel 『ANTHOLOGIE DE LA LITTÉRATURE JAPONAISE』 (Delagrave 1910)
- Renondeau (1971)** G. Renondeau 『Anhologie de la poésie japonaise classique』 (Gallimard 1971)
- Pigeot (1985)** ジャクリーヌ・ピジョー 「翻訳の問題—百人一首の仏訳英訳をめぐって—」 (『比較文化』 31-2 東京女子大学比較文化研究所 1985. 3)
- Pigeot (1986)** Jacqueline Pigeot 「Problèmes de traduction: La Poésie japonaise classique」 (『Revue de Littérature Comparée』 60 (2 [238]) H. Champion 1986. 4)
- Sieffert (1993)** René Sieffert 『De ceent poètes un poème』 (Publications Orientalistes de France 1993)
- Nakamura et Ceccatty (2005)** Ryoji Nakamura et René de Ceccatty 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』 (Edition Philippe 2005) ※ 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』 (édition de la Différence 1982) の第三版
- 島津 (2001)** 島津忠夫訳注 『新版 百人一首』 (角川ソフィア文庫 2001)
- 鈴木・山口・依田 (2002)** 鈴木日出男・山口慎一・依田泰 『原色小倉百人一首』 (文英堂 2002)
- 吉海 (2011)** 吉海直人 『百人一首を読み直す—非伝統的表現に注目して—』 (新典社 2011)
- 吉海 (2017)** 吉海直人 「「ちはやぶる」幻想—清濁をめぐって—」 (『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』 第 17 号 同志社女子大学 2017. 3)

付記

本稿を成すにあたりフランス語訳の音韻や解釈についてご助言くださった京都フランス語教室「游藝舎」の Hiroto 先生および Philippe 先生の両氏に感謝申し上げます。

